

## 第44回成人病公開講座

### 病院の薬剤師さんは何をしているの? 抗がん剤を安全に使う—緩和ケアの服薬指導—新しい薬の開発

大阪府立成人病センターと大阪対ガン協会などが連続開催している成人病公開講座は6月23日、第44回講座を、大阪市東成区の同センター6階で開いた。今回は、「薬剤師さんの役割」をテーマに、同センター・喜恵・薬局長が司会・進行して、薬局関係者が講演、参加した約100人からの質問にも答えた。

「抗がん剤を安全に使う～薬剤師の役割」と題して、丁元鎮・副薬局長が講演。「クスリ（治療）とリスク（危険）は背中合わせ？」と、抗がん剤にはどんな副作用があるかなどについて、抗がん剤ごとの主な症状を分かりやすく話した。さらに、「各副作用の出やすい時期」「悪心・嘔吐対策」「脱毛してしまったら」などについて対応を説明、「抗がん剤は両刃の剣。副作用を完全になくすことはできないが、最近では研究が進み、上手にやり過ごすことは可能になった。わからないことは薬剤師に質問して欲しい」などと話した。

「緩和ケアと服薬指導～チーム医療の中で」と題して、井上聰子薬剤師は、「緩和ケアと聞いて、『がん治療ができなくなった方への医療じゃないの？』『がんの終末期に受けるものじゃないの？』との一般的なイメージがあるが、ちょっと違う」と話し始めた。

「緩和ケアの目的は、まず痛みを取り除くこと。そして、痛み以外の症状も除いていくようにします」と述べ、痛みを取り除く薬として、「炎症を抑える鎮痛薬」「中等程度の痛みになったら使い始める医療用麻薬」について説明。特に麻薬について、「日本で『がんの痛み治療』の普及が遅れているのは、医療用麻薬に対する誤解や偏見があるためです」と、服薬指導で偏見や誤解を解く、薬剤師の役割を強調した。



「新しい薬を開発する～治験の話」について、下辻恒久主査が講演。「新しい薬を開発するには、基礎研究（くすりのもとの発見）2～3年」。第2段階で「非臨床研究・動物で実験に3～5年」、そして、人で実際に使ってみる。人での有効性や安全性について調べる臨床試験の中で、「国にくすりと認めてもらうための試験を『治験』といい、健康な人で検討する第1相、少数の患者さんで検討する第2相、効果が多数の患者さんに当たるかの最終検討をする第3相に分けて慎重に進めます」と薬の誕生までの流れを分かりやすく話した。

### 次回は循環器の成人病対策

今年度の成人病公開講座はさらに3回を予定している。次回の第45回は9月8日（火）午後2時から、大阪府立成人病センターで開く。「循環器の成人病対策に向けて」をテーマに開催。淡田修久・副院長の司会・進行で①「心疾患を予防するためには」②「睡眠時無呼吸症候群と心疾患」③「腹部大動脈瘤と閉塞性動脈硬化症」について講演、質問も受ける。

第46回は10月13日（火）、第47回は12月8日（火）を予定している。ともに大阪市天王寺区の大阪府医師会館で開き、無料。新聞などで告知して参加者を募集する。